〔泌尿紀要13巻5号
昭和42年5月〕

泌尿器科紀要

第13巻 第5号

昭和42年5月

随想

日本泌尿器科の黎明

大阪 中川小四郎

この度，広大加藤篤二教授には京大前任稲田教授の後任として京都に転任，同大学泌尿器科4代目の担任教授として活躍されることと相成ったわけだが，斯科学界のため洵に慶祝に堪えない．

数日前のこと，本誌編集の酒徳博士から「随想」を執筆するようとのご下命に接したのだが，期日がさし迫っているから，諾否の返信は速達でということであったので，取敢えず，折返し「拝諾」のご返事を差上げて置いた次第である．

ところが，いざとなって見ると，貴重な紙面を拝借するにふさわしいと思われるような話題が，頭に浮んでこないので，止むを得ず，標題に見られるような大げさな見出しをまず掲げてみたわけである．しかし，その内容たるや，いわゆる「大山鳴動して鼠一匹」の類のものであろうことを予め諒承されたい．

わが邦における泌尿器科の発足の時期，といったような問題に関する諸家の意見は恐らく区々であろうと思われるが，ここでは一応，大正の初期から，その末期に至る約15カ年と仮定してみたわけだ．

前書が少し長くなったが，以下の記事は要するに，この黎明期における1～2の古い想い出にすぎないことも，前もってお含みおき願いたい

日本の泌尿器科は，その発足以来，多数先輩諸先生の努力により，日進月歩の一途を辿り続けているわけだが，最近，特に治療方面で注目されているのは人工腎臓とか腎移植などの問題である．しかし，かような複雑微妙な問題については，古い過去の時代には到底夢にすら見られなかったと称しても過言ではあるまい．斯科のこの現状と，その黎明期における実態とを比較対照するとき，全く隔世の感を禁じ得ないものがある．

と申しても，唯これだけでは，説明が聊か不十分かと思われるので，甚だおこがましいことではあるが，筆者の「膀胱鏡談」(日本医事新報，昭和30.8.6)をここに抄録転載させて頂くことにする．これは，ただし，大正3年発行，朝倉文三先生著「膀胱鏡検査法」に対する石黒忠悳子爵(陸軍軍医総監)の序文の再録にすぎないことも前もってお断りしたい．

「(石黒子曰く) 明治30年某月，余知人に血尿患者あり，これを医学博士橋本（綱常）子爵（陸軍軍医総監）に托したるに子爵，これを腎臓病に因るものとなす　余その左右いずれの腎臓よりするなるかを質したるに子爵手を振って曰く，左右いずれよりするかを確かむること難きを悲む．よく電鏡装置の検査法あるを書上に見るも未だ親しく其器械を手にせず，其術も亦難しとて悵然たるもの久し．後，明治36年初秋，子爵突然として来り，満面喜色を湛へて曰く，頃日，血尿患者あり，本日，之を新帰朝，朝倉博士に嘱し，電鏡装置の膀胱鏡を用いて検査し，判然，其右腎よりするものなることを診定したり．先年貴君の質問に答ふること能はざり時の事を想起して欣喜に堪えず．

器械の精新と朝倉博士の此術に精通せることを併せて談じ，欣然として帰えらる……」

「(筆者の作文) これによって考えると膀胱鏡が日本の臨床医界に初めて登場したのは，大体今から半世紀以前のことであることが推測される，のみならず当時はこの器械が如何に珍奇な存在であったかが容易に窺われるわけである．膀胱鏡は現在では内科における聴

診器と同様に，泌尿器科臨床には，なくてはならない重要検査用器の一つであって，筆者はこの器械を使用する度毎に，その患者に対する絶大の福音を思うと共に，これが創案者たる独医ニッツェ氏の不朽の功績を礼讃せずにはいられない.」

かようなわけで，膀胱鏡の果す役割の甚大であることはいうまでもないが，要するに従来はこれと他の方法とを併用することによって，腎臓の患側とかその機能状況などを判定し，そして，病腎の治療を決定することが終局の主な狙いであったと約言することも出来よう（尤も，これはただ腎臓疾患だけについての話ではあるが).

従って，人工腎とか腎移植といったような問題は，わが泌尿器科の黎明期においては，まだまだ，実現とは余ほど縁遠いものであったであろうことが容易に察せられる.

因に，朝倉先生は大正元年，日本泌尿器病学会（後に，日本泌尿器科学会と改称）を設立し，爾来多年にわたり，その会長を続けておられたことは周知のとおりである.

さて，つぎに，考えて見たいのは，大学における泌尿器科学独立講座の問題である.

現在，本邦における医科系教育機関の数は46であるが，そのうち斯科の独立講座をもっていない所はほとんど皆無である.

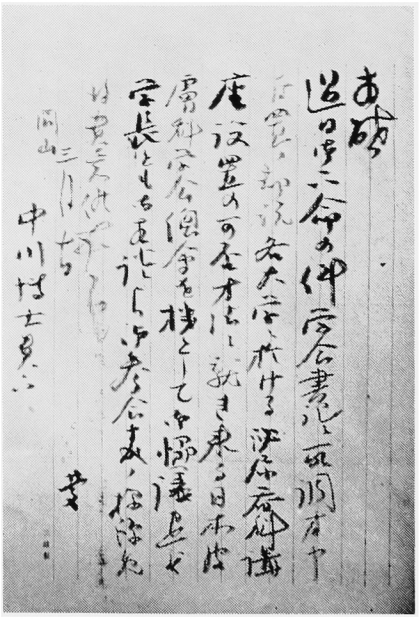
田村一博士が，その「泌尿器科学会の変遷」（臨床泌尿器科，21巻，３号，昭和42.3.20発行）において述べておられるように，泌尿器科学講座が最初に設けられたのは慈恵会医科大学であって，朝倉文三先生が還暦を迎えると共に開業をやめ，同大学の初代教授に就任されたのが大正11年で，これに次いで，大正13年に九大，15年に慶大にそれぞれ斯科の講座が設置せられ，これを契機として間もなく，東大，京大などにひき続き，他の大学にも漸次およんで現在にいたったわけである.

ところで，日本泌尿器科(学）を語るとき，まず，いちはやく我々の頭に浮んで来る大先輩はというと，それは土肥慶蔵先生である（上述の如く，朝倉先生もご同様であるが).

周知の如く，土肥先生は大正15年６月，東大教授の職を退き，昭和６年11月６日，66歳を一期として他界せられたのであるが，昨41年６月をもって，生誕百年を迎えたので，同月18日，日本皮膚科学会主催のもとに，その記念式典が東京において，執り行なわれたことは，いまなおわれわれの記憶にありありと残っている.

先生が日本泌尿器科(学）の発展のため，陰に陽に力を尽され，特に，大学における斯科の独立講座の設置に対しては，率先努力されたことはいうまでもない.

さて，その事実の一端を物語るものとして，茲に先生の遺された，ご筆跡の一葉を紹介させていただくことは，あながち無意義ではあるまいと信ずる．挿入の写真は，筆者が，かって岡山医大に勤めていたころ，先生から賜わった書簡（親展）を撮影したもので，その日付は３月10日となっているが，年号は調べてみれば判るのだが，多分大正11年か12年だと思っている.



土肥先生書簡

その文意は，ご覧の通りであるが，くずしがきのため，すこし読みにくい文字がないでもない.

ついでながら，鶚軒土肥先生は漢学に長じ，唐詩をよくされ，文章に傑出しておられたことは，あまりにも有名である.

なお，これは一片の書状にすぎないが，これをよすがとして，先生の崇高なる人格の片鱗に接することが出来るような気がする.

「鏡にはうつらぬ人のまごころも
　　さやかに見ゆる水茎のあと」
　　（明治天皇御製）

擱筆に当り，稲田教授によって創刊された本紀要が，今後とも堅実な歩みをつづけ，さらに一層，内容の充実した機関冊誌として，その使命を全うするよう切望する次第である.